

学校心理士会神奈川支部ニュースレター

第3号



2007年6月17日発行
発行責任者
日本学校心理士会神奈川支部
支部長 岡田守弘

巻頭言

「変化」が激しいと言われて始まった21世紀ですが、社会においては「格差」という言葉が様々なところで使われるようになっていきます。国語辞典によれば「変化」とは「変わる事。変えること」、「格差」とは「品等や資格の差」だそうです。

学校心理士の大きな役割として「児童生徒と学校教育を支援する」ということが言われています。「変化」の激しい社会で生きていくための「力」を児童生徒が身につけることを育成する場である学校も「変化」が求められるようになってきています。

折しも政府が今国会の最重要法案の一つとして位置づけている教育関連3法案が、衆議院で可決されました。このことにより教育、特に学校教育に関することから「変化」が生じることが予測されます。それは学校教育を取り巻く「大人」に関するものかもしれませんが、行き着くところとしては児童生徒の学ぶ環境に影響をもたらすことになるのではないのでしょうか。プラスの「変化」もあればマイナスの「変化」も生じるように思うのは私の「杞憂」でしょうか。

「児童生徒と学校教育を支援する」ことが役割である私たちには、今後も多くのことが求められると思います。私たちは「学校教育」という集団生活の場、集団学習の場において児童生徒のみならずその保護者、学校教育を担う教職員の求めに応じていく「力」を身につけ、伸ばしていかなければならないと思います。そして、そのことはいみじくも「格差」＝「資格の差」となるのではないのでしょうか。

学校心理士として「学校現場で行動する心理学」を生かしていくために、以下に5点の留意点を述べたいと思います。

1. 人と人とのふれ合いを大事にし、相手とのことを通して自分を捉える。
2. 本物を見るためのアセスメントを重視し、エビデンスベースドに徹する。
3. 気軽さと腰の軽さをもって行動することを重んじる。
4. 自分の考えと意志を核とした自立を柔らかく表現すること。
5. 誠実さと、意気を感じる「心意気」を大事にすること。

(日本学校心理士会神奈川支部長 岡田守弘)

2006年度 日本学校心理士会の報告

2006年度日本学校心理士会が下記のとおり開催されました。神奈川支部の会員の皆様も多数参加されたことと思います。当日の研修につきまして、簡単ですが報告したいと思います。

1. 日時：2006年12月3日（日）9:30～16:00
2. 会場：科学技術館サイエンス・ホールおよび会議室
3. 主催：日本学校心理士会（担当…東京・北関東・南関東ブロック）
後援：東京都教育委員会、全国連合小学校長会、全日本中学校長会、東京都公立小学校長会、東京都中学校長会、日本教育心理学会、日本特殊教育学会、日本発達障害学会、日本発達心理学会、日本LD学会、日本学校心理学会、日本応用教育心理学会、（社団法人）日本教育会

4. 基調講演 「学校心理士への期待と課題」

日本学校心理士会会長 松浦 宏 先生 (大阪教育大学名誉教授)

(講演の概要)

(1) 専門資格としての「学校心理士」…何故、学校心理士の資格が必要なのか。

「専門家」としての社会的認知はなされているのか。

(2) 学校心理士と学校教育…学校心理士は学校の悩みを解消できるか。

学校の悩みとは、①子ども、教師、学級・学校、家庭をめぐる課題、②教育に関する新しい課題
学校心理士はこれらを解消する役割を演じなければならない。

※ 「学校」…子どもが安全・安心・楽しく学べる場。

※ 「教師」…学級(学習集団・生活集団)づくりと学級経営、教科指導、生徒指導の専門家。

(3) 学校心理士と心理教育的援助サービス…学校心理士の対象

直接的には「心理・教育的問題に直面している子ども」、教育的には全ての子ども。

(4) School Psychologist の役割 (アメリカ)

学校における学校心理学リーダーシップと機能の領域

- | | |
|----------------------|------------------------------------|
| ① データに基づく意志決定と説明責任 | ② 人間関係コミュニケーション、コラボレーション、コンサルテーション |
| ③ 効果的授業と認知的・専門的スキル | ④ 社会化と生きる能力の発達 |
| ⑤ 発達と学習における児童生徒の多様性 | ⑥ 学校の構造、組織、風土 |
| ⑦ 予防、心身の健康管理の促進、危機介入 | ⑧ 家庭・学校・地域のコラボレーション |
| ⑨ リサーチと計画の評価 | ⑩ 法律に関する、倫理的実践と職業的発達 |

(5) Educational Psychologist の役割 (主としてイングランド)

児童生徒の教育を支援するシステムがあり、特別な教育的ニーズのある子ども (SEN) を支える専門家が学校内にいる。

Educational Psychologist (教育心理士) は地方教育局内におり、日常は担当地区の多くの学校に出向き、アセスメントを行う。学校は、教育心理士から、アセスメントに基づいた「判断=Statement」をもらい、児童生徒の教育指導に必要な体制(経費と人員)を整える。

(6) 学校心理士の役割は何か…問題を起こしそうな子どもの発見 (= 予防)

これからの学校心理士は、一般論としての役割説明だけでなく、学校心理士が自らの役割を焦点化して、子どもや教師、学校あるいは保護者からの援助ニーズに対応できる体勢を示す必要がある。→ 学校心理士への信頼。

(7) 学校心理士としての教師…社会化の仲介者

- ① 教科の学習を通して、アカデミックスキルの形成→学び方の技術
- ② 学級活動を通して、ソーシャルスキルの形成→対人関係
- ③ 児童生徒への働きかけとしては、1対1のカウンセリング関係のみではなく、1対多(教師対多数の児童生徒)も

(8) 学校心理士の活動の形態 (方法)

- ① 予防…心理教育的アセスメント、行動観察。
- ② 介入・治療…カウンセリング、心理療法。教師・学校・保護者のコラボレーション、コンサルテーション。
- ③ 開発…子どもの成長・発達のための教育。

(9) 学校が成功するのに必要なこと

a. 経験の広がり, b. 学校を勇気づける, c. 家庭・地域とのコラボレーション, d. 学校の改善

(10) スクールサイコロジストの変化と新しい挑戦

- a. コラボレーションの増加, b. 病名で分類することからの脱却, c. 児童生徒の達成感の高揚
- d. 改善への関心の広がり、役割の多様化

(報告: 北村 耕一)

5. 研修会（問題提起と討論会）

第1分科会（学習支援・学級経営…報告：泉原 恭子） 参加者数 87名

「学習集団を活用した授業作り」

杉江 修治先生（中京大学）

協同の原理に基づく教育活動を総称して協同教育と呼ぶ。この協同教育の原理と技法、協同学習の条件について学び、学習集団に生かした授業作りについて考えた。

<アメリカにおいてジョンソンらが提唱した協同学習の5つの基本要素>

- ① 集団成員は自分の働きが仲間のためになっており、仲間の働きが自分のためになっているということを理解するために、協力して取り組む課題を準備する。
- ② 共同的な相互作用が理解や習得を促進し、多様な同時学習を可能にするために、集団は異質集団で 4,5人に止めることが必要である。
- ③ 協同学習の後には自分ひとりで取り組む力が増していなければならない。
- ④ 互いに知り合い、信頼しあい、正確なコミュニケーションを交わし、受容しあい、支えあい、対立も建設的に解決する技能を持てるような経験が必要である。
- ⑤ 集団の活動を振り返り、より良いあり方を追求すべく、集団ごとに自己評価を行い、協同への積極的な態度を育てる。

これらの基本要素を念頭に、協同学習の進め方について、(1)学習課題を明確にする、(2)司会・記録・発表などの役割を輪番にする、(3)誰が指名されても発表できるようにする、(4)異質集団にする、(5)一時間の学習の流れや一単元の流れを伝える、(6)振り返りカードなどで学んだ内容を振り返る、などの説明があった。

「協同教育のすすめ」

安永 悟先生（久留米大学）

現在、大学生に対して協同に基づく授業を行い、その有効性を検証している。具体的には、キャリア教育の必要性を理解し将来に備えることを目的として、毎回異なる学生4人でグループを構成し、仲間同士の挨拶、意見交換、記録紙への記入という流れで授業を展開した。その効果として、出席するだけでなく参加する授業・競争から協同という学習観の変化・対話力の向上・コミュニケーション不安の低下・他人から仲間への関係性の変化が見られた。さらに、参加者同士で簡単な演習を行い、自己紹介の方法としての枠作りや・傾聴・ミラーリングなどを実践し、学校心理士同士の仲間意識を感じ、協同教育の一部に触れることができた。

第2分科会（生徒指導・教育相談…報告：北村 耕一） 参加者数 85名

「学校心理士と生徒指導」

八波 光俊 先生（東京理科大学）

- ①学校心理学における問題状況の解決では、子ども自身の自助資源や多様な援助資源によるチーム援助が強調される。
- ②予防、早期発見、介入がポイントとなる。チーム援助による生徒理解、対応が必要。特に予兆段階での対応が重要である。また、アセスメント能力も重要となる。
- ③学校心理学の特色と学校心理士が提供する心理教育的援助サービスは、学校現場の生徒指導そのものであると言える。
- ④キャリア教育によって将来を見ている。学校から社会への移行を考えさせる。生徒指導に専門性が要求されている。サポートチームによるネットワーク型チーム援助が求められている。

「学校心理士と学校教育相談」

大野 精一 先生（日本教育大学院大学）

- ①「相談教諭」が必要である。また、(教師は)観察法を学ぶ必要がある。
- ②教育的(指導)方法(=コーチング)が欠けている。コンサルテーションは間接的方法。
- ③相談を専門に行ってきた教師が校務分掌上、適切的な位置に行けるだろうか。
- ④カリキュラムの中で教育として学校心理学を行う。→尾道市立中、高校でのソーシャルスキルトレーニング。
- ⑤事例については、教師の力量アップのための教材とする。(全国規模の事例センターの構想)

※後半の討論会も「チーム援助」、「各機関との連携」、「学校心理学的アセスメント」について話しあわれました

第3分科会（特別支援教育…報告：田村 順一） 参加者数 260名

「特別支援教育と学校心理学」

永松 裕希 先生(信州大学)

①特別支援教育の概要と課題

②専門家が特定の子どもに決まった支援を行ってきたものが「特殊教育」とすると、「特別支援教育」では支援の対象、支援を行う主体が多様化するため、コーディネータの必要性が高まる。

③コーディネータの専門性に学校心理学の観点が多く関わるのではないか。

「特別支援教育の推進における特別支援学校の役割」瀬戸ひとみ先生(神奈川県立

相模原養護学校)

①地域支援センターとしての特別支援学校の機能、教育相談員としての関わり

②気づきあい、学びあい、支援しあう学校風土作りのプロセスと工夫

③特別支援学校の持つ資源の活用。もっと教師は自信を持って。

④地域を支え、地域で生き、生かされる特別支援学校を創造することが必要。

※ 基調提案と司会からの補足説明をふまえ、フロアから様々な質問、意見、各地域での実践紹介があった。

※ 参加者数が最も多く、十分な討論には至らなかったが、特別支援教育をどう理解し、また地域で定着していけばいいか、コーディネータの立場の危うさなど、現状と課題について活発な意見があった。

※ 最後に石隈利紀先生(筑波大学)から、相互に支えあうことの意義と学校教育における支援と調整役の必要性についてのまとめがあった。

地区会報告

<横浜地区の活動報告> 事務局：齋藤 一政

横浜という土地柄か、参加メンバーは多種多様な職種の方々です。毎回話題提供者から、ご自身の携わったケースや実践されている活動を発表していただき、それにメンバーの皆さんそれぞれの立場からコメントをいただくという形式で地区会を進めております。一つのケースでも、メンバーの立場や職種によって異なる見地からの意見を聞くことができ、大変勉強になっております。

毎回メンバーは入れ替わりますが、12~3名程度の方々にお集まりいただき、あまり肩肘張らずリラックスした雰囲気です。今まで参加したことのない方もご自由にご参加下さい。

支部からのお知らせ

○今年度第2回神奈川支部研修会は、10月14日（日）に開催されます。芳川玲子先生に講師をお願いして、アメリカで行われている「いじめ」対策の教育プログラムを教えていただく予定です。皆様の参加をお待ちしております。

編集後記

神奈川支部ニューズレター第3号を刊行いたしました。年2回の発行を目標にしていたのですが、遅くなってしまい、申し訳ないと思っております。

総会や研修会、地区会の報告がメインになると思いますが、会員の皆様の投稿も歓迎しています。このニューズレターが支部の皆様にとって有益なコミュニケーションの場になることを期待しています。

e-mail.spkanagawa@yahoo.co.jp（編集部）